フィンガーボウルと李鴻章（1）

遊　佐　　徹

第1章　フィンガーボウルの話

1、日本人とフィンガーボウルの話

フィンガーボウルという名前の器を御存知だろうか。フレンチレストランなどで手を使って食さざるを得ない料理が供された時、ともに出てくる卓上で指先を濯ぐための小さな容器のことである。だが、こうした説明は、いま質問を投げかけられた皆さん方にとって、いらぬお節介であるかもしれない。というのも、私達日本人の多くは、幼い頃からある物語を通じて――つまり、たとえ自分では実際に使ったことがなかったとしても――フィンガーボウルのことをよく知っているからである。

もちろん、その物語とは、フィンガーボウルの水をそれとは知らずに誤って飲んでしまった客人に対する主人の気遣いについて語ったあの話である。

何時の頃からそうなったのかははっきり判らないのだが、この物語は、我が国の道徳読み物においてスタンダードな地位を占め続けてきたし、実際、学校教育でも重宝されてきた歴史を持つ[1]。例えば、次に挙げるのは、現在使用されている教育出版の道徳副読本『小学どうとく　心つないで　4』（2011年度版）に載る「礼ぎの心」と題されたそれである。

これは、ある国の女王様の話です。

外国からお客様がやってきました。

女王は、お客のためにえん会を開きました。そして、たくさんのごちそうを出し、心をこめてお客をもてなしました。お客は大へんよろこびました。

えん会が終わりに近づいたころ、くだものが、テーブルの上に出されました。くだものといっしょに、水の入ったフィンガーボールも運ばれました。フィンガーボールというのは、くだものを食べた時に、よごれた手をあらうものなのです。

ところが、このお客は、そのフィンガーボールの水を飲んでしまいました。えん会に出せきしていた人たちは、びっくりして、いっせいにお客の顔を見つめていました。すると、その様子を見ていた女王は、自分もフィンガーボールを取り上げ、ゆっくりと、中の水を飲んでしまいました。そこで、みんなも女王につづいて、だまってフィンガーボールの水

を飲んだということです。

これが、最近の日本の子供達が習い憶える典型的なフィンガーボウルの話である。実に見事に、この副読本とセットの教師用指導書[2]が「ねらい」で示している「礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接しようとする心情を育てる」内容となっているといえるだろうが、もしかすると、このバージョンを読んでみて、自分の記憶するフィンガーボウルの話とやや違う印象を持たれる方もいらっしゃるかも知れない。おそらく、多くの方々は、もう少し具体的な人物(もしくは人物像)のイメージをもってこの物語を記憶してきたのではないだろうか。

私が、フィンガーボウルの話に関する記憶を質問した周りの人達からは、大抵の場合、女王については具体名が返ってきた。最も多かったのはイギリスのヴィクトリア女王で、エリザベス女王がそれに次いだ。また、女王ではないがやはりイギリスのウィンザー公(エドワード8世)という回答もあった。かくいう私もヴィクトリア女王として記憶していたのである。一方、客人、すなわちフィンガーボウルの水を誤って飲んでしまった人物としては、やや漠然と、アラブの首長、インドの貴族、アフリカの部族長、ペルシャの王様……が挙った。

要するにフィンガーボウルの話の登場人物には、そもそも様々なパターンがあったらしいことが判るのであるが、これらの記憶からは、この物語が道徳訓話とは別種のある特徴を帯びた内容を持つものでもあったことが見えてくるのではないだろうか。

イギリスの君主として設定された主人側に対し、客人達は、単なるイノセントな存在として宴会の席に着いているのではなく、歴史的事実に照らせば容易に理解できるように、その君主の支配を現実に受けている／受ける運命にある／受けたことのある国や地域の象徴として登場しているのである。この政治論的な支配と被支配の関係は、また、主人側の思想・常識・価値観で捉え直せば「文明」と「野蛮」の関係でもある(もちろん、この思想・常識・価値観こそが支配の理論的根拠、説明原理となっていたのである)[3]。この物語とは、両者の絶対的とも称し得る優劣関係を基本的な構造として持ち、しかも、「文明」と「野蛮」のコントラストを強く際立たせる場(フィンガーボウルに象徴される西洋式テーブルマナーがそれを照らし出す光源である)において、「文明」側に位置するものが「野蛮」なる存在に「思い遣り」を示すことによって、さらにみずからの「文明」性を確認し、誇るという手の込んだ仕掛けによって構成されたものだったと考えることができるのである。

実際、現在の小学校の道徳副読本に載るフィンガーボウルの話は、そうした話を下敷きにして創作されたものだったという[4]。現代社会に相応しい道徳訓話として、本来(?)の物語が帯びていた植民地主義的、帝国主義的色彩を拭い去る必要があったのである。

2、フィンガーボウルの水を飲んだ李鴻章1

ところで、この本来(?)のフィンガーボウルの話には、中国人が登場人物となっているバージョンも存在するのである(いずれ詳述するように、実は、この物語のヴァリエーションは随分豊富で、日本人が登場するものまである)。その中国人とは、清朝末期の政界、官界に君臨し、

外交の舞台でも活躍した実力者、李鴻章である。その李鴻章は、客人側、すなわちフィンガーボウルの水を誤って飲んでしまう側である。一方の主人側として登場するのが、こちらも歴史に名高きプロイセンの鉄血宰相、オットー・フォン・ビスマルクである。

この当時の洋の東西において国際政治史を彩った著名人によって展開されるフィンガーボウルの話は、少なくとも最近の中国人にとっては周知の物語となっているようである。ここでは、李丹崖によって2007年に書かれ、その後あちこちの雑誌等に転載された「ビスマルクの礼節（俾斯麦的敬礼）」と題されたバージョン[5]をやや長文ではあるが引いてみよう。

1896年、齢70を超えた李鴻章は、勅命を奉じて、ロシア、ドイツ、イギリス、フランス等の国々を訪問した。ドイツはその旅程の2番目の訪問国である。到着後、彼はただちにハンブルクへと赴き、ビスマルクのもとを訪れた。

ビスマルクは、19世紀後半のドイツの宰相で、かつてプロイセンを支えて一連の戦争を戦い抜き、ドイツの統一を成し遂げた人物である。そこで、統一達成後、人々はその剛腕の傑物を尊んで「鉄血宰相」と称するようになっていた。しかし、そのビスマルクの目には、東方にもうひとりいるという自分同様絶大なる権勢を誇る鉄血の偉人――李鴻章の姿が映っていたのであった。ビスマルクは一度李鴻章と膝を交えて語らってみたいと思い続けていたのだが、この日ついに実現の機会を得たのであるから、その喜びようは大変なものであった。遠来の客への好意を十分に表わすべく、ビスマルクは盛大な宴を催して李鴻章をもてなした。

宴が始まると、ビスマルクと李鴻章は会場の中央に座を占め、料理を口に運びながら虚心坦懐に会話を交わし続けた。テーブルに並ぶのは新鮮なフルーツと山のような御馳走で、ビスマルクは心楽しく李鴻章に相伴してそれらを味わっていた。ひとしきりの酒盃の遣り取りが終わると、ビスマルクは参会者全員に水を出すよう給仕係に命じた。李鴻章はちょうど喉が渇いていたので、水を目にするや袖を翻して器を取り上げ、一気に飲み干すと仕草優雅にテーブルにそれを戻したのだった。ところが、本人には知る由もなかったのだが、李鴻章のこの振る舞いは自身の面目を潰す行為だったのである。というのも、この水とは、西洋式テーブルマナーの一環としてフルーツを食べた客に手を濯がせるために出されたもので、それを李鴻章はこともあろうに胃袋に収めてしまったからである。

李鴻章の振る舞いにビスマルクを始めとする参会者一同は唖然となった。そのなかの幾人かはこらえ切れずに笑い出しそうになったが、ビスマルクの顔色ひとつ変わらぬ表情を目にしては、誰もそうした挙に及べる訳もなく、笑いを噛み殺すとビスマルクの反応を見守った。すると、ビスマルクは微笑を浮かべて李鴻章を眺め遣りつつ躊躇なく水の入った器を取り上げ、周囲に会釈を送ると一息にそれを飲み干したのである。その光景を目にした人々は、瞬時にビスマルクの意図を理解した、李鴻章が誤って手を濯ぐための水を飲んだことで居たたまれない思いをしているのではないかと心配し、助け舟を出したのだと。

これは、ビスマルクと李鴻章が親睦の情を交わした際のささやかなエピソードである。あるいは、李鴻章は死ぬまでこの出来事の真相を知ることはなかったかもしれない。しかし、西

洋の歴史家達は、この一瞬間を忘れることがなかった。彼等は世に伝え残すべきこの歴史のひとコマを「ビスマルクの礼節」と名付けたのである。

西洋世界において名声赫々たる人物であるビスマルクが、西洋式テーブルマナーを弁えぬ遠来の客（文明論的他者）の李鴻章に対してとっさの気遣いを示した美談であるという点において、この「ビスマルクの礼節」のストーリー展開は、私達が良く知るフィンガーボウルの話とまさにそっくりであるといえる。もちろん異なる点を指摘することもできる。その最大の点とは、主人と客人のそもそもの関係で、ビスマルクが強い思いを寄せ続けていた「東洋のビスマルク」とついに会談を果たし、もてなす訳であるから、両者の間には優劣関係は存在していないことになるであろう。しかし、その一方で、フィンガーボウルの水を飲んでしまった李鴻章の行為は、西洋文化の基準に照らした時には嘲笑の対象以外のなにものでもなくなるのであり、しかも、それに対してビスマルクが思い遣りを示すのであるから、李鴻章の地位は2重に貶められることになるのである。やはり、フィンガーボウルの話は根源的に単なる美談ではあり得ない。事実、この物語の現在の中国での受け取られ方は、李鴻章個人に対する嘲りや蔑み、もしくは国際舞台において近現代の中国人達が蒙った屈辱という文脈[6]に沿ったものとなっている。

3、フィンガーボウルの水を飲んだ李鴻章２

ところが、このビスマルクと李鴻章を主人公とするフィンガーボウルの話には、上に引いた物語と同時期に書かれた別バージョンが存在するのである。以下に訳出する楊万翔の「李鴻章“誤りて”手洗い水を飲む（李鴻章“謬”飲手洗水）」という文章[7]がそれで、やはり盛んに転載されているのでよく読まれたものであるらしい。

1896年、李鴻章は、齢70の高齢をもって、ロシア、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカといった国々を訪れた。ドイツに到着し、ベルリンでドイツ皇帝に拝謁した後、李鴻章はわざわざハンブルクまで出向き、すでに引退の身であったビスマルクのもとを訪れた。

ビスマルクとは、19世紀後半に活躍したドイツの宰相で、プロシア国王を助けて一連の戦争を戦い抜きドイツの統一を実現したことから世に「鉄血宰相」と称された人物である。一方の李鴻章はといえば、かつては中国で絶大なる権勢を誇った人物であり、外国人達は彼のことを「東方のビスマルク」と持ち上げていた。

史書に記すところによれば、彼等東西洋両「ビスマルク」は、「高名互いに慕いあい、一見するや旧知の如し」だったという。ビスマルクは、早速盛大なる宴会を開いて、この遠来の客をもてなした。各国のドイツ駐在使節も招きに応じたことで、宴会場はさながら「ミニチュア版の国連」の体をなし、ビスマルクと李鴻章はその真んなかに座を占めることになった。宴もたけなわの時分、給仕係が小さな銀碗に注ぎ入れた水を各人に配り置いた。フルーツを食べたあとに指を濯ぐためである。ところが、李鴻章は西洋人の習慣を弁えていなかったので、その銀碗を取り上げると一口啜り飲んでしまったのである。

しかし、中堂李大人（中堂とは大学士の別称、李鴻章は1874年以降、文華殿大学士の地位にあった――遊佐）は、なんともエレガントに“誤った”のだった。その銀碗を手に取り水を啜る姿の優雅で物柔らかな様が「鉄血宰相」を圧倒してしまったのである。ここで知って置くべきは、李鴻章の精神世界に関してかつて梁啓超が次のような描写を残していたことである――李鴻章は、ひとに接する際、傲慢軽侮の色を表情に浮べ、相手を完全に見下すのを常としていた。外国人との交渉においてはとりわけその傾向が強かった。

李鴻章の物腰に対する衷心からの感服により、さらにはその感情によって生じた悠久の中国文明に対する心底からの畏敬の念により、ビスマルクは、李鴻章の銀碗の持ち方を真似て同じようにそれを両手に戴くと、指を濯ぐための水を一口啜り飲んだのであった。

宰相のこの行為が口火となって、あとは以心伝心、満座の大官達も皆銀碗を手に取ったのである。

同じビスマルクと李鴻章によって構成されるフィンガーボウルの話ではありながら、前者とは随分トーンの異なったストーリーとなっていることが判るであろう。こちらの話では、ビスマルクではなく李鴻章が称賛されているのである。

この相違を先に確認した本来（？）のフィンガーボウルの話の基本構造を念頭に置きながら説明し直せば、前者においては、李鴻章が結局「野蛮」の地位に貶められる一方でビスマルクは西洋人の代表者としても、また個人的資質としても「文明」の地位を主張することになっていたのに対し、このバージョンでは、西洋文化の基準では「野蛮」の地位に置かれてしまいかねない李鴻章がその個人的資質とそれの背景をなす悠久の中国文明によって救い出される、あるいはビスマルクの立場に即していえば、自身の「文明」性が他のそれによって乗り越えられしまう物語が語られているのである。

これはもう私達がよく知る道徳訓話としてのフィンガーボウルの話とはいえないだろう。事実、楊万翔はこの物語を記すに当たって、中国近代外交を先導した人物である李鴻章の外遊時の行動に関して巷間に流布している醜聞、悪評を「取るに足りない噂話」として退け、それとは異なるエピソードがある、と断っている。つまり、李鴻章の名誉回復を図ることを目的にこの物語は紹介されたのである。

その目論見の成否はさて置くとして（ただし、その目論見の由来、目論見が必要となった理由に関しては興味がある）、気になるのはこのふたつの物語の落差である。どちらの李鴻章が真実なのであろうか。いや、李鴻章がフィンガーボウルの水を飲んでしまったところまでは一致しているのであるから、正確を期そう。どちらの李鴻章「像」が真実なのであろうか。

4、受け皿からコーヒーを飲んだ李鴻章

さらに話をややこしくしてしまうかも知れないが、このフィンガーボウルの水を巡って展開する李鴻章のエピソードに関しては、実はもうひとつの同類のプロットを持つ物語の存在を指摘することができる。しかも、それは李鴻章をもてなす主人がなんとヴィクトリア女王である

という誠に興味深い内容なのである。以下に引くのは、清朝末期に生を享けた歴史家、簡又文が1930年代に雑誌に書き連ねた清朝の軼話[8]のなかの一篇である。

また、次のような話を聞いたことがある。李鴻章がヴィクトリア女王主催の宴に招かれた時、供されたコーヒーが余りに熱かったので、彼はそれをカップの受け皿に移し入れ、ひと口ひと口落ち着き払った様子で啜っていた。この光景に座を占めていた招待客はみな失笑を漏らした。すると、女王は主人役として、この中国からの大切な賓客がいたたまれない気持ちでいるのではと慮り、自分もコーヒーを受け皿に注ぎ移して同じように持ち上げると啜り飲んで李鴻章に付き合ったのであった。この出来事をもって、人々は、李鴻章が無知ゆえに恥を晒したと非難するのだが、私にいわせれば、ヴィクトリア女王こそが機転の利く賢明な人物だったということになる。

李鴻章が飲んだものが、フィンガーボウルの水から受け皿に注ぎ移したコーヒーに替わっているだけで、話の展開と結末がひとつ目のビスマルクと李鴻章の物語と同じであることは明らかである。

この物語の存在は、訪れたヨーロッパの国々で李鴻章が失態を犯し続けたことの証しなのだろうか。それとも、やはりヴィクトリア女王こそが李鴻章を「野蛮」の地位に貶めるに相応しいキャラクターと判断された結果だったのか(もちろん、その場合にでも何故受け皿からコーヒーを飲む話として語られたのかという疑問は残る)。

いずれにせよ、プロットを同じくするいくつもの物語の存在は、主人公の李鴻章の位置を「文明」—「野蛮」、「西洋」—「中国」の2本の軸で作り成される座標のうえに落ち着きがたく漂わせるものであるといえるだろう。

5、フィンガーボウルの水を飲まなかった李鴻章

さて、これまで採り上げてきたいくつかの李鴻章のエピソードは、少なくともフィンガーボウルの水を「飲んだ」系の話としての類型化を図ることができるものといえるだろうが、実は、「飲まなかった」というバージョンも存在するのである。以下に引くのは、訪問した国の名や主人役の人物が不明であるなどシチュエーションがかなり曖昧であるばかりでなく、李鴻章が「飲まなかった」液体が供された目的すらも明確に示されていないという「飲んだ」系の3篇に比べいささか頼りない感じのする物語であるが、『中学歴史教学参考』という中華人民共和国教育部が主管(編集、発行は陝西師範大学が担当)する歴史教育関係者向けの雑誌の2002年第11期に掲載されたものであり、内容に加えての注目点もある一篇だといえる。作者は王春暉で、その「李鴻章欧米歴訪時のエピソード(李鴻章出訪欧美花絮)」と題された文章の一節に紹介されている。

さらにもうひとつ、どこの国で起きたのかは定かでないが次のようなエピソードがある。ある国で李鴻章が酒宴に出席した時のこと、開宴に先立って、給仕係が薄いコーヒー色の液体

の入ったボウルを捧げ持ってきた。その意味が判らなかった李中堂は、スープだろうと考えて何杯かを自分の皿に掬い取った。さてそれを頂こうかという刹那、彼は周りの来賓達の訝しげな視線からふと気配を感じ取り、機転を利かせ皿に手を差し伸ばしてそのなかで指を濯いで給仕係に取り下げさせたのだった。これは実に絶妙な起死回生の一手であった。李中堂の機智とユーモアがテーブルマナーで失態を演じることを回避させ、大清帝国の体面を保ち通すことを可能にしたのである。さもなければ、かように盛大な外交の舞台で、李大人は窮地に追い込まれ、完全に面目を失うことになってしまっていたことだろう。

この物語では、フィンガーボウル（？）の水を飲まなかったことで、李鴻章自身と清朝の体面が守られたことになっている。それを可能にしたのが李鴻章の資質であったという点は、先に引いたふたつ目のビスマルクと李鴻章の話に似ているといえる。しかし、こちらの話では、李鴻章の資質によって彼（および清朝）の体面を損なわせかけた西洋は乗り越えられることはない、というより、西洋文化の優位性そのものがテーマとはされていないようである。

本来（？）のフィンガーボウルの話やビスマルク／ヴィクトリア女王と李鴻章を登場人物とするそのバージョンを支える「文明」―「野蛮」のテンションは弱化されているようである。あるいは、この物語は日本の道徳副読本に載るそれのように再創作されたものであると考えるべきなのだろうか（しかし、それにしては「大清帝国の体面」といった時代がかった文言もみられるが）。

それにしても、何故このように様々な李鴻章を主人公とするフィンガーボウルの話が存在するのであろうか。この現象は、中国人としては李鴻章に限って現われることなのだろうか。また、これらの話は、私達がよく知るフィンガーボウルの話とどのような関係にあると考えればよいのだろうか。もちろん、先にも提示した通り、物語における李鴻章の役割、描かれ方も興味深い疑問点である。

次章では、こうした疑問を解明する作業を改めて李鴻章の履歴に立ち返ることから始めることにしたい。

注

1．柴崎直人「小学校道徳副読本における「礼儀」の扱われ方」（『道徳教育』№330　2012年）によれば、2012年時点で、本文で後述する教育出版の副読本以外に学校図書『小4 かがやけみらい』、光文書院『小学道徳　心つないで 4年』、日本文教出版『新版　小学校道徳　あすをみつめて　4年』がこの物語を掲載しているという。

2．村井実、横山利弘、尾田幸雄監修。

3．近代から現代にかけての一時期、イギリスがアジア、アフリカの諸国、諸地域、諸民族に対応する際に、文明的に優越した地位にあることを強く自認し、あるいはそれらを「文明化」する使命感まで持つに至ったことに関しては、すでに様々な研究からの指摘がなされている。ここでは代表的なものを挙げて置く。

ピーター・J・ボウラー『進歩の発明　ヴィクトリア時代の歴史意識』（平凡社 1995年 東京）。

東田雅博『大英帝国のアジア・イメージ』（ミネルヴァ書房　1996年　京都）。

木畑洋一『大英帝国と帝国意識』（ミネルヴァ書房　1998年　京都）。

アンドレ・グンダー・フランク『リオリエント　アジア時代のグローバル・エコノミー』（藤原書店 2000年　東京）。

4．注1によれば、生活評論家の吉澤久子の作成という。また、吉澤は皇太子時代のエドワード8世とアラブの首長が登場人物となっているバージョンを下敷きにしたという。
5．「ビスマルクの礼節（俾斯麦的敬礼）」は、まず江蘇省婦女聯合会主管の『莫愁・天下男人』という男性向け半月刊総合文化雑誌の2007年第9期に発表されて以降、転載が繰り返された。
6．フィンガーボウルの水を飲んだ話のみならず、李鴻章が外遊時に残したエピソードの多く（それらについては、やがて本稿でも採り上げることになる）は多く「出洋相（醜態を演じて恥を晒す）」と称されて振り返られている。また、それが李個人の問題としてばかりか民族、国家の問題として捉えられる向きがあることは、例えば2002年に『語文世界』という初中等国語教育雑誌に載った中学1年生の作文の結論部分「（ロシア訪問の折、大衆の面前で痰を吐いた時の）李鴻章は、単に個人としてその場にいたのではなく、民族と国家を代表していたのです。……礼儀正しさを重んじてこそ国家は隆盛し、民族は尊厳を有し、人民は安定し、社会は進歩できるのです。」からも容易に理解できる。
7．中国共産党青年団福建省委員会が主管する青年向け半月刊総合誌『青年博覧』2006年第9期に最初に掲載された。
8．それらは大華烈士の筆名で発表され、1935年に『西北東南風』という名でまとめられ良友図書公司から出版された。筆者が使用したのは、2000年に出版された上海書店の民国史料筆記叢刊版である。